蒔繪通說

和装本
チ多 9
1497
1

チ多9
1497
1-2

蒔繪通覽

上

蒔繪通覽

○

巻上目録

蒔繪史
聖武時代　鎌倉時代
東山時代　秀吉時代
徳川時代
蒔繪工程
平蒔繪　高蒔繪
研出し蒔繪　金貝

切金　青貝
金銀粉青貝金貝類
諸漆類　蒔繪用諸器械
器械解説　蒔繪の手術

巻下

蒔繪師傳
幸阿弥道長　仝　長晏
古満休伯　山本春正
○梶川久次郎　木阿弥光悦
五十嵐太兵衛　幸阿弥長救
中村宗哲　緒方光琳
小川笠翁　蒔繪師清兵衛
蒔繪師源三郎　山田常加
塩見小兵衛刑部太郎
蒔繪師市太夫　古満寛哉
原羊遊齋　堆朱平十郎
青海勘七　青貝長兵衛
治五左衛門其　玉楮象谷
二宮桃亭　豊助
家原自全　兒島新七

蒔繪工雜傳
附
塗師傳　春慶　珠光々
羽田五郎　盛阿弥
篠井秀次　藤重藤巖
関宗長　山打三九郎
塗師雜傳
蒔繪通覽目錄終

早稲田大学図書

蒔繪史

飯島虛心著

○古人蒔繪の時代を分ちて二となす上代物時代物なり後鳥羽天皇已前の蒔繪を上代物といふ後人更に時代を分ちて五となす聖武時代鎌倉時代東山時代秀吉時代德川時代なり聖武時代は聖武天皇より源頼朝公執政の時に至る鎌倉時代は源頼朝公より足利義政公の時に至る東山時代は義政公より豊臣秀吉公執政の時に至

る秀吉時代は秀吉公より德川家康公執政の時にいたる德川時代は家康公より王政維新の際に至るをいふ今後人に倣ひ時代を分ちて蒔繪史を作る

○聖武時代

蒔繪の始詳ならざれとも聖武天皇の時既に蒔繪ありしなり（當時蒔繪の名はあらざれとも其製は即蒔繪なり）蒔繪の最古と稱する天皇の太刀の鞘は即末金鏤にして其の製後世の研き出し蒔繪のごとくまつ黑漆をもてこれを塗り其の上に稜角ある金末をもて鳥獸草木を蒔き再ひ黑漆をもてぬりこれを研き出したるものなりこの太刀は現に大和國奈良の東大寺にありて貴重の寶物たり又當時平文の漆器あり平文は一に平脫文と稱し其の製は薄き金片に種々の花章を彫り漆器に嵌入せしものにして即後世の金銀金具なりこれまた東大寺にあり光仁天皇の寶龜十一年奈良の西大寺の僧佛經を納るゝ辛櫃を造る其の櫃の上に金銀をもて山水雲鳥を蒔繪せり（此の頃はまた蒔繪の稱あらす）桓武天皇の時風流華美に流れ人或は

蒔繪平塵の劍を帶す平塵は平等の意にして塵は細なる金末を厚く蒔きたるをいふなり平城天皇の大同三年制して漆部司を内匠寮に併せ爾来内匠寮に於きて漆工を督し漆器を造らしむ漆部司は漆部即漆工を督し漆器を製せしむる所なり此の司は孝德天皇の時に置きたるなり其の前には漆部連あり連は督長なり漆部連の祖は三見宿禰にして宿禰は孝德天皇の時の人なり醍醐天皇の時蒔繪の業精巧なり當時の蒔繪これを天平年間のものに比較すれは金末甚密にして製造更に一層の精巧を加ふるか如し此の頃の器に梨子地の製あり梨子地は金末を蒔きたる其の模樣恰梨子の實の肌のごとくなれは名つく即平塵なり故に一に塵地といふ天皇制して朝廷におきて齋會を供する時の器具を定め蒔繪案一脚平文案二脚となすこれよりさき大抵平文の器具を用ゐ蒔繪は少なかりしなり花山天皇の時天皇まき繪をこのみ工人に命し器物に山水人物を蒔繪せしめ其の器の緣に銀あるひは錫鉛を嵌入せしむこれを於幾

倶知といふ又嘗工人に命し硯箱に蓬莱山及び手長足長の圖をまき繪せしむ一條天皇の時蒔繪の技いよ〳〵進みて其の製造に用給る金粉の量目極めておほし大抵蒔繪一尺の面積に金粉六十匁を用ひ一筥を造るに手間料絹六百疋なりしと其の頃の蒔繪の今に現存せるは大和國法隆寺寶物中の袈裟筥なり納袈裟をおさめあれは名つく蓋し袈裟を納るゝために造りたるものにあらす其の蒔繪の蓬莱および松喰ひ鶴などの華文あるを見て知るへしまた山城國延暦寺中止觀院所藏の經筥なり松平忠禮君所藏の片輪車の手匣土井利興君所藏の浮線綾の手匣松平直亮君の蝶の手匣博物館の三鈷筥等は皆當時代のものにして稀世の名品なり鳥羽天皇の弘仁二年陸奥の押領使藤原清衡中尊寺を創建す其の製は先つ布著をなし梨子地螺鈿をちりはめたるなり柱には胎藏界の大日如來十二躰を蒔繪せり土人これを金色堂また先堂といふ今猶陸前國平泉に現存せり近衛天皇のとき禁中の諸器を金粉地にし蒔繪螺鈿および

五彩の硝子を嵌入せしむ金粉地は當時沃懸地と稱す其の製は金粉をまきてこれを研磨せしものなりこれを粉塡といひ又塗梨子地とも云後白河天皇の時蒔繪の業最も盛にして諸器を製する多し當時蒔繪師則季平文師清原貞安なるものあり召されて上皇に見ゆ時人稱して名譽となす蓋し我國蒔繪の盛なるはこの時をもて極となす

按に人或は蒔繪を支那の傳來といふものあり大なる誤りなり支那にて漆器を造りしことは最も古けれと蒔繪は蓋し我國の發明ならん瑯邪代醉に云く唐太宗向褚遂良曰舜造漆器禹彫其俎其事見韓子由余對秦穆公曰舜作食器流漆黑其上國之不服者十三禹作奈器深其外朱畫其內國之不服者二十三とまた漆園の吏漆其身なと古くより漆をうへまた漆を用ひし例は少なからされとも蒔繪はかの國の古書に見る所なし東大寺の献物帳に載せたる唐朝より我國に贈りし太刀の鞘末金鏤とあるは即梨子地ならん蒔繪にあらす黒

川真頼氏の説には蒔繪は奈良の朝新意を出たし創造せしものならんといひ痛く支那傳来のものにあらさることを論して近頃發刊せし美術雜誌の國華に掲けたり

鎌倉時代

源平の乱と共に諸工業も亦乱れしか唯蒔繪の業は猶おとろへす後鳥羽天皇の壽永三年大嘗會を行ひし時朝廷諸名匠を召して今のこれに用ゐる所の諸器具を作らしむ蒔繪師は右衛門少志紀助正および中原末恒平文師は散位清原貞光および清原貞安なり皆當時の妙手と稱せらる源頼朝公覇府を鎌倉に建つるにおよひて工人を召しまき繪を製する多し其の製頗る精巧なり今現存する當時の蒔繪は相模國鎌倉の鶴岡神社にある硯箱籬に菊の梨子地蒔繪また同社にある十二手匣伊豆國三島神社にある手匣等にしていつれも文治建久の頃製せしものなるか上代の製におとらさるかことし又松平直應君所藏の片輪車の手匣（此手匣は松平忠禮君所藏の手匣よりは形

大にして模様異なれりも當時代の物にして珍品なりすへて金粉を用ゐることは昔日に異ならされとも

これより已後漸次に金粉の量を減すること、なれり此の頃一種の髹法を發明せり其の製は醍醐天皇の時に創造せし彫木の壹種にして牡丹梅花雲形等を彫りて先つ黒漆を塗り其の上に赤漆を施して裝飾せしものなりこれを鎌倉彫といふ鎌倉彫は蒔繪にあらす美術家多くは蒔繪の部に加ふをもてしはらく此に載せ花園天皇の天和四年朝廷近江國日吉神社を造營せしとき諸名匠を召す蒔繪師は佛成助時、

稱覺、良円、貞惠、蓮月、國光、妙蓮、平文師は光阿禪法是法、善法、心性、行則顯性見阿實時、光守等にして當時の名手なり後花園天皇のとき明主瞻基工人を我國に來たし蒔繪の術を學はしむ業成りて帰る

七修續藁に曰く古有戲金而無泥金有貼金而無描金灑金有剔紅而無縹霞彩漆皆起自本朝

因東夷或貢或傳而有也描金灑金浙之寧波多倭國通使因情熟言餂而得之灑金尚不能如彼之円故縱倭扇亦寧波人造也泥金彩漆縹霞宣

徳間遺人至彼傳其法

東山時代

後花園天皇の寶徳年間足利義政公茗宴を嗜み頗る奢侈を極め工人に命し蒔繪を製せしむ其の製花紋を蒔くを專とせすして多く山水人物等を高く蒔かしむ是れよりさき蒔繪の業大に衰へしが義政公自ら工人を督し髹漆の技を回復せり公嘗工人をして梨子地比多蒔繪の書翰筥を製せしめ日用に供す時人これを公方様御用の文筥といふ比多蒔繪とは筥の全体に蒔繪を施せるものなりこの頃の蒔繪今猶存する多し一々掲くるに暇あらす工人は幸阿弥道長同道清同宗金茶家珠光五十嵐某泰阿弥清阿弥等ありて皆名手と稱せらる

或曰く高蒔繪の製は蓋し此の頃に始りたるならんと予もまた足利已前に高蒔繪あるを知らす黒川氏の説に高蒔繪は足利氏のときおこれりといひ傳ふれともかの土井利興君か所藏の浮線綾の手匣を見るに其の嵌入せ

る螺鈿よりはすへての沃懸地は勿論浮線綾の文高く見ゆ又鎌倉時代にも高蒔繪に類するものありされは足利氏の時に始まりしにはあらす唯高蒔繪盛に行はれしならん

秀吉時代

元亀天正年間戰乱相継き人民生に安せすよりて蒔繪の業大に衰へたり豊臣秀吉公政權を掌握するにおよびて工人を奬勵し蒔繪を製せしむ然れとも其の製東山時代におとれり唯京師の工人幸阿弥長晏同長玄五十嵐道甫の徒巧に蒔繪せり和漢諸道見知抄に長府蒔繪太閤時代京の蒔繪師なり木地に蒔繪のもの有と國華に載せてあり

按に秀吉公の夫人京師東山に高臺寺を草創して其の須弥壇に蒔繪を施さしむ今現に同寺にあれと其の製精密ならす人皆これを見て當時の蒔繪を評し難して精巧ならすといへりされと茶器などの中には東山時代におとらさる蒔繪多し世人宜しく目を拭ふて是を視るへし

德川時代

將軍德川家康公天下を平定するにおよびて万民皆業に就き蒔繪の技再び盛なり慶長五年德川氏蒔繪師幸阿弥長晏を召して俸給を賜ふ同時堆朱平十郎もまた召されて俸給を賜ふ同時尾崎宗印なる者あり細川三齋の扶持せし工人にして蒔繪の名手と稱せらる三代將軍家光公の時寛永十三年古満休意を召して俸給を賜ふ同時梶川久次郎も亦召されて俸給を賜ふ同時本阿弥光悦出て、一派の蒔繪をおこす同時家光公江戸芝增上寺を創立し二代將軍秀忠公の廟を造營す廟中に蒔繪の寶塔を安置す奇巧精妙未曾有の蒔繪と稱せらる四代將軍家綱公の時寛文二年皇居大災に罹る公幸阿弥長房梅原久音等に命して後西天皇および皇后の坐右の器具に蒔繪せしめて上る画様は粒菊菊唐草枝菊筋菊等なり五代將軍綱吉公の時家綱公の廟を東叡山に造營しこれに蒔繪せり廟内は古満休意專工を施し扉および天井等は濃梨子地に葵紋の蒔繪佐幸阿弥與兵衛長房菱田榮休房貞奈良八郎右

衛門雪勝鈴木弥左衛門正備栗本太郎衛門先屋
同源左衛門信親榎本又右衛門寛継等工技をほ
とこし田阿弥梅原小幅の三氏其の工をたすく
（これより先き休意は紅葉山の佛殿に蒔繪せしとそ）同公高嚴院殿の廟を
東叡山に建て廟中に蒔繪せしむ画様は水に蓮
雲にして両わきは梅の古木扉は油煙形瓦色々
の画なり柱の所〳〵濃梨子地に織紋色々廟後
に製造者の姓名および小文をしるす文に當御
佛殿及び御廊下御唐門御水屋皆以五彩漆之就
中御内陣の画工狩野養朴後素之漆工九人潤色
之於是記其姓名以垂不朽云延寶九年辛酉九月
菱田源之丞成信幸阿弥與兵衛長好榎本又右衛
門寛継栗本源左衛門信親栗本太郎左衛門光廣
鈴木弥左衛門正備奈良八郎左衛門雪勝菱田甚
左衛門房貞幸阿弥長安とあり其の製研麗にし
て優美なり元禄二年同公日光東照公の宮殿を
造營し蒔繪を施さしむ此の時の蒔繪師は幸阿
弥與兵衛長道奈良八郎左衛門貞利古満久藏安
明（明は巨の誤り歟）の三氏主となりて鈴木弥左衛門正
之栗本太郎右衛門茂利源左衛門正俊梅原七郎

右衛門重壽四阿弥又五郎武宗服部庄太夫永貞
古満久蔵安明奥村四郎兵衛嘉之の八人腕を揮
つて其の技を施し各其の姓名を廟中の寄敷居
にしるす蒔繪精密にして自嚴威あり日光に遊
ふものこれを見て慨然其の宏壯佳麗なるを嘆
美せざるはなし同四年同公柳澤保明の邸に行
くをもて諸侯に命し其の當日用ゐる所の諸器
具に蒔繪して上らしむ諸侯競ひて二人に命し
蒔繪を製せしむ其の製いつれも研麗なり中に
上代の技風を存し好事をして感嘆せしむるも
の多し此時にあたり京師に山本春山緒方光琳
あり江戸に小川破笠青海勘七あり各新意を出
し蒔繪の技を施し人をして目を驚かしむ德川
氏の世蒔繪の盛なるは此時をもて第一とす後
人當時の蒔繪を稱して常憲院時代蒔繪といふ
常憲院は綱吉公也 明治六年澳國博覽會に當時代製造せ
し見臺を出品せしか佛國郵船ニール号に搭載
し帰る途中同七年二月この船我國伊豆の近海
にて沈没せり同八年七月海底を探て船中より
この見臺を得たり海底にあること殆と十八月

にして質色毫も變する事なし其の漆質の美且
堅きは推して知るへし 今現に我か博物館に有
これに反し近世製造の漆器は悉く破損して再
用に供するものなかりしとそ或曰く蒔繪の製
て破損せさるに堅緻なるにより
堅固なるによれりと其理あるに似たり六代將
軍家宣公の時寶永年間永田友治塩見小兵衛等
の名工出つ其製頗精巧なりきれと元祿年間の
製に比すれは劣れるか如しこれより後蒔繪の
業漸衰へ十一代將軍家齊公華美を好み諸道具
に蒔繪せしむよりて蒔繪の業再盛なりしか後
には只其の外觀を美にし内面を粗にして技を
省くの弊を生し工人の意匠漸拙し然れとも當
時猶古滿寛哉井上白齋原羊遊齋の徒ありて或
は新意を出し或は古風を守り堅緻なる蒔繪を
製出せり殊に羊遊齋のことき多量に金粉を
施し佳麗なるものを製出す王政維新の後海外
貿易の途漸開くるに從ひ工人競ひて諸器に蒔
繪し輸出すること夥しきれと堅緻なるもの甚
稀なり嘆すへし

蒔繪工程

蒔繪に數種あり即平蒔繪高蒔繪中蒔繪研き出し蒔繪青漆蒔繪黑まき繪暗夜蒔繪切金蒔繪粉蒔繪金銀金貝青貝青貝あしらひ平目梨子地木目梨子地金銀やすり粉研き出しの類なり今其中に就き平蒔繪高まき研き出し等の工種を擧く他は推して知るへし

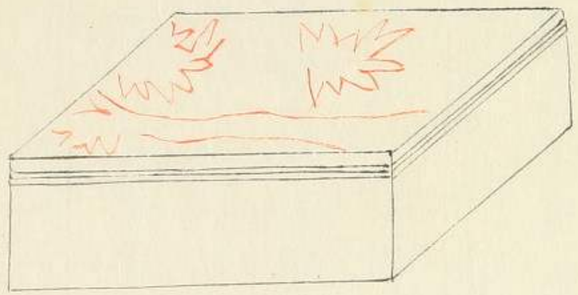
蒔繪に流派あり幸阿彌蒔繪梶川蒔繪古滿蒔

繪春山蒔繪光琳蒔繪青海蒔繪の類にして各一家の技と稱して秘して人に語らす今予此に述ふる所は蒔繪通常の工程にして固より流派に拘泥するにあらさるなり

○平蒔繪

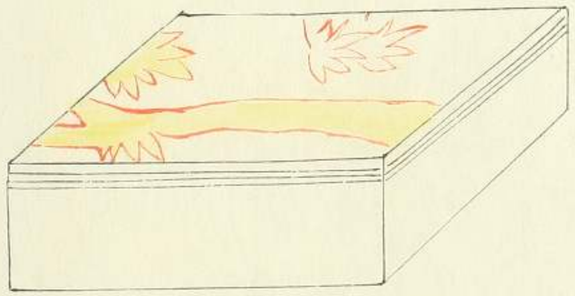
平蒔繪はたいらに蒔きたる蒔繪なれは名つけしなり先つ蒔繪臺を坐の前におき其の上にて吉野紙數枚をかさね下繪漆を漉すこと凡四五回にして漆の加減ほとよくなりたらは朮盤を左の拇指に挿み漆を其の上に滴らしねぢ筆に

第一圖



つけ蒔繪せんとする諸漆器を前におき又は手にもちて山水花鳥花紋等こゝろの儘に画くなり又細密の圖画新様の花紋等は先つ薄葉紙に下画を画き猪の牙にてよく紙をこすり平滑にしさて下繪うるしをもて其の紙の裏面より下繪のとほり筆意を失はぬやう繪とりこれを漆

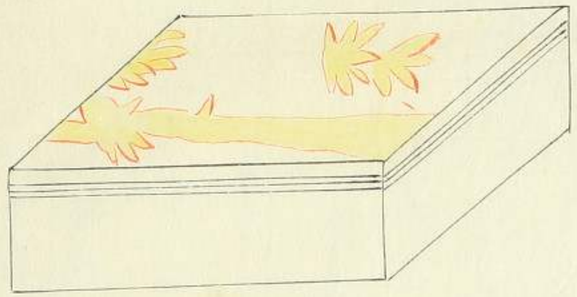
器の表面に貼付せしめ鯨
の節篦もて軽々に紙上を
こすりしかして紙を剥き
されは繪様宛然として漆
器に印残するなり此にお
きて打粉をもて其の面を
うち繪様を鮮明ならしめ
繪漆をもて其の上を画き
陰室に入れ乾かすなり即
第一圖のごとし繪漆は乾



第二圖

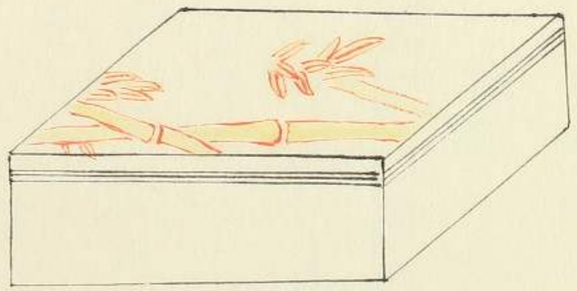
きの度をして極めて遅緩ならしむへし其の法
は銅篦の上に繪漆をたらし炭火にて焙り沸騰
せしめ水分を去るなりこれを焼漆といふまた
繪に樟脳を入るれは漆うすくなりてかはきお
そしさてかの漆器乾きたらは蔭室よりいたし
厚朴炭をもて軽々に画面を研きむらをなをし
又爪盤に繪漆をたらしねぢ筆もて画面を画き
なから金粉をまき毛棒をもてはきかけること
第二圖のごとし金粉をはきかける業は手早く
すへし然らされは金粉うるしに貼付せさる事

第三圖



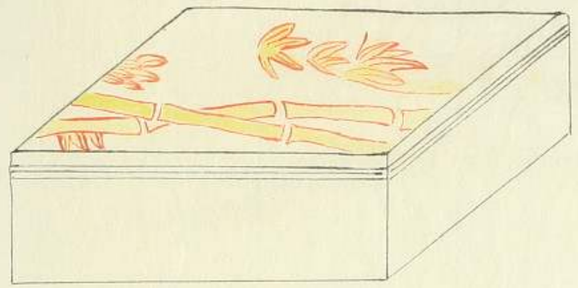
あり殊に四五月八九月陰曆の頃はうるしの乾き最もはやき時なれは細密なる繪は少しつゝ画きて金粉をまくへしさて金粉を蒔き吉野漆もてすり漆をなし蔭室に入れ乾かし出たして蠟色炭（即百目紅の炭）をもて輕々に研きて平滑にし又引き研をもて其の

上を摩擦し再ひよし野漆をもてすり漆をなし軟らかにもみたる杉原紙もてこれを拭ひ蔭室に入れかくすること四五回に至る即第三圖の如ししかして画圖の細密なる所を画くなりこれをすじ書といふすじ書は細ねぢ筆に繪漆をつけて画き金物をまき



第四圖

第五圖



毛棒をもてはきかけ吉野漆にて其のふを拭ふなり即第四圖のごとしさて吉野漆にて拭ひたらはよく乾かし引き研きをなして輕々に研き最後に角粉を指のはらにつけ輕々に磨き光澤を生せしむへしもし細密にして指のとゞかさる所は鯛牙をもてみかくへしかして綿をもてこれを拭ひ成ユする也

第五圖のごとし

○高蒔繪

高蒔繪はたかくもりあけたる蒔繪なれは名つく高蒔繪に二樣あり一は漆上なり一は鏽上なり漆上は古來よりさたまりたる方法にして鏽上は百數十年前の發明也しかして漆上のユ程は煩はしくして鏽上は簡易也こゝをもて近來漆上をなすもの甚稀也

漆上は前の平蒔繪の工程のごとく下繪うるし
をもて直に花紋花鳥なとを画くか又は下繪を
貼付せしむるかこいろのまゝになしてさて蠟
色漆に伊勢うるしを和し繪面を塗り高く漆を
盛り上け其の漆のかはかぬうちに銀粉または
錫粉を蒔き毛棒をもてこれをはき漆を埋め蔭
室に入れ乾かして蠟色炭をもてこれをとぎ吉
野漆にてすり漆をなし蔭室に入れ乾かしかく
すること數回にしてさて繪漆をもて繪面を画
き金粉をまき毛棒にてはき吉野うるしにてす
り漆をなし蔭室に入れ乾かししかして精細に
わりかきをなしてすり漆をなしまた蔭室に入
れ乾かし引き砥にてすり漆をなしまた蔭室に
入しむる工程は前に同し
鏑上は前の工程のごとく下繪漆をもて画きさ
て蠟色漆に砥粉をまぜ鏑漆を製し繪面をぬり
高くもりあけ其の漆の乾かさるうちに銀粉を
撒布し蔭室に入れ乾かし名倉砥をもて研きむ
らをなをし又同漆をもて前のごとく塗りて蔭
室に入れ乾かし名倉砥をもて研きむらを直し

第六圖

また同漆をもて前の如く塗りて蔭室に入れ乾かし蠟色炭をもて研きしかして繪うるしをもて繪面を画とり金粉をまき毛棒にてはきわり書きをなし引き研ぎおよび角粉をもちゐ仕上げをなす工程は前におなし

○研出し蒔繪

研き出し蒔繪は金銀粉をまきたる上に漆をぬりて研き出したるものなれは名つけたるなり平蒔繪と同しく工程をもて蒔繪をなし蠟色および諸色漆をもて其の上を塗るなり即第六圖のごとし しかして厚朴炭をもてこれを研き

第七圖

出しのちによし野うるしにて摺り漆をなし蠟色すみをもてみがくなり其の他の工程は前におなしくして成工するなり即第七圖のごとし

以上三種の蒔繪は工人常に行ふ所の工業なり此の他蒔繪の製造種々あれとも畧す又金貝梨子地切金等の工業はおのつから蒔繪と異なれとも現今は皆蒔繪師の工業となれりよりてこに其の工程の一二を擧けて示すこと左のごとし

○金貝

往時金貝師と稱へ金貝をはることのみを專業とするものありしなり今はなし

金貝は極薄き金の板かわにしてこれを漆器に貼付せしむるなり其の法は下地の繪を鏽上に し細密の所は黏漆をもて云かき其の上に金貝をはるなり五六十年前より膠をもて金貝をはることを發明せり其の法頗る簡便なり其の以前はみな漆にはりつけたるなりしかして金貝の繪のそとにはみたしたる所は小刀の先にて截り取りよく漆をもて金貝の緣をぬり粉を蒔

くなり金貝のふちは甚まくれやすきものなれ
は深く注意すべしさて金貝をはり草木花蕊の
ごとき細密のところは焼うるしにて下繪の裏
を画き金貝の上に貼付し印残せしめ其の漆の
かはきたる時さし針をもてもと繪のとほりに
きめこむ也

○切金

切金は金貝より稍あつき金の板かねにしてこ
れを漆器に貼付せしむる工程は畧金貝に同し
まつ鋏をもて切金をきり其のまくれたる所は
切金ならしの上におきこすりて平滑にし竹箸
の尖にはさみてはりつける也

○青貝

青貝はあつき貝は地鏽をつける前に貼付せしめう
すき貝は地鏽をつけて後に貼付せしむるも宜
しさて貼付せしめたらは蠟色漆または諸色を
もて一面に其上を塗りたて蔭室に入れ乾かし
名倉砥をもて研き出す也

青貝模様きりぬきの法は吉野漆もて青貝に
模様を画かきしかして画の裏を漆にてぬり

よく其漆を乾かし梅むきの酢に漬けおけは貝軟らかになるなりそを取り出たし小刀もて繪の形をきりまはすに恰紙をきることく自由にきれるものの也

○梨子地

梨子地の種類多し微塵あらみぢんこく微塵刑部等にして其の方法は梨子地漆をもて諸器具を塗て其のうるしの乾かさるうちに羽管をもて諸のみぢんを撒布ししかして梨子地消し漆をもて梨子地を塗りけし蔭室に入れ乾かし厚朴炭をもて研き引砥にてみがくなり

○蒔繪に用ゐる金銀粉および金貝青貝の類極めて多し今左に掲く

上々粉　薄朱粉
焼金極微塵　焼金微ぢん
焼金花子　焼金微塵常
焼金常　青粉
小判微塵　小判極微塵
小判花子　小判微塵常
小判常　錫粉

赤銅粉　銀粉
銀極みぢん　銀みぢん
銀花子　銀微塵常
銀常
焼金刑部平目（平目栗子地の類に用ゐる）
同大一平目　同大二平目
同大三平目　同常三平目
同小三平目　同さき平目
青貝（以下螺鈿に用ゐる）　赤貝
九元　不滅

琉球

金貝（以下金貝に用ゐる）　鑞粉（金銀銅鉄あり）
本ねぢ（あつき金貝なり研き出し蒔繪に用ゐる）　銀金貝（鉛錫の金貝もあり）
並ねぢ（切金に用ゐる）
きめつけ（薄き金貝にして蒔繪に用ゐる也）　下等の

○蒔繪に用ゐる諸漆類

蒔繪に用ゐる諸漆は大抵は種にして吉野漆蠟色うるしせしめ漆梨子地漆朱漆下繪うるしだみうるし高蒔うるしなりされと漆器製造法に述へたることとく元質はもと一なり皆調合して

後に名を附したるなり其の調合法は同紙に載たれは今其用法を擧るのみ

吉野漆はすり漆に用ゐるも

梨子地うるしは梨子地平目の類に用ゐるも

蠟色漆は下繪うるしおよび高蒔うるしに用ゐるなり

せしめ漆は下地に用ゐまた地鑄に用ゐるも

朱漆はすへて色漆を調合するに用ゐるも

下繪漆は朱を梨子地漆に入れて調合するを本法とす

だみとは濃の意也

六七十年前より蠟色漆に紅からを入れ又吉野漆及ひせしめ漆に紅からを入るこれ其の畧法なり

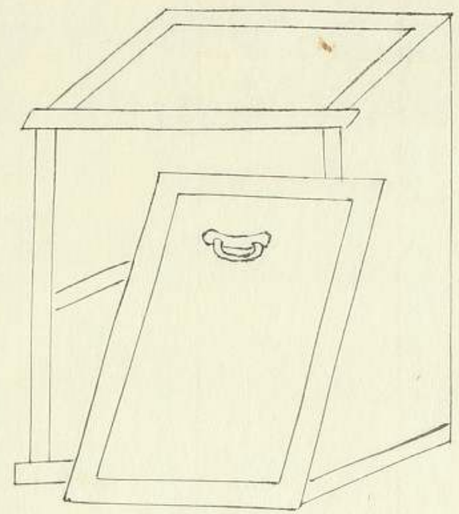
だみ漆はせしめ漆に吉野漆を調合したるものなりだみとはすへて漆をかき出し平らにならすをいふ

高蒔漆は蠟色漆に灰すみ入れ又は砥の粉をまぜたるなり高蒔繪に用ゐる

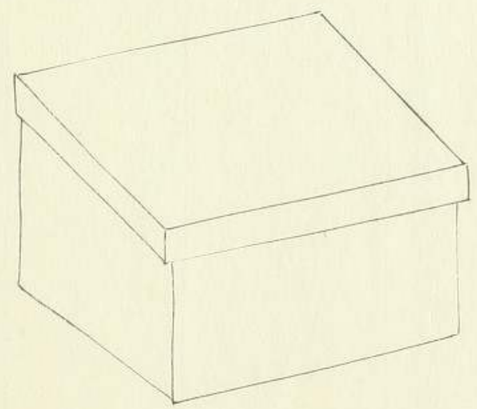
其の他諸漆を調合して種々適宜の法を調合する事は各自得の技なれは今言ひかたし

第一圖

蔭室

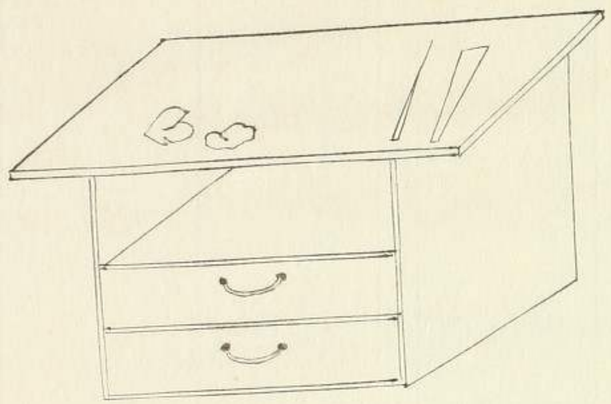


手風呂

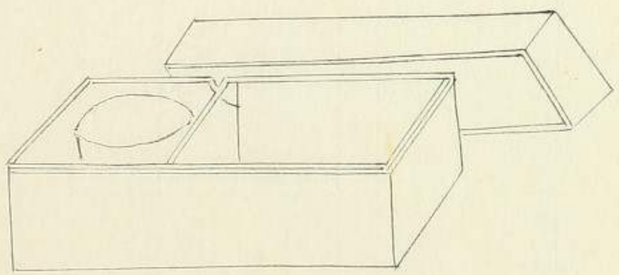


第二圖

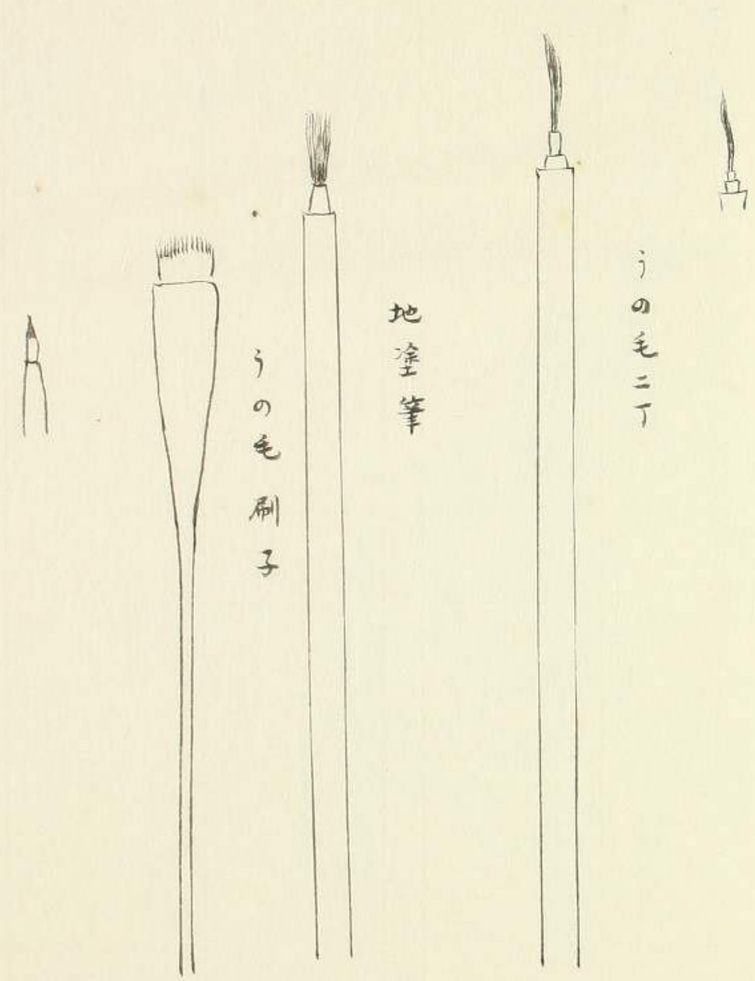
蒔繪臺

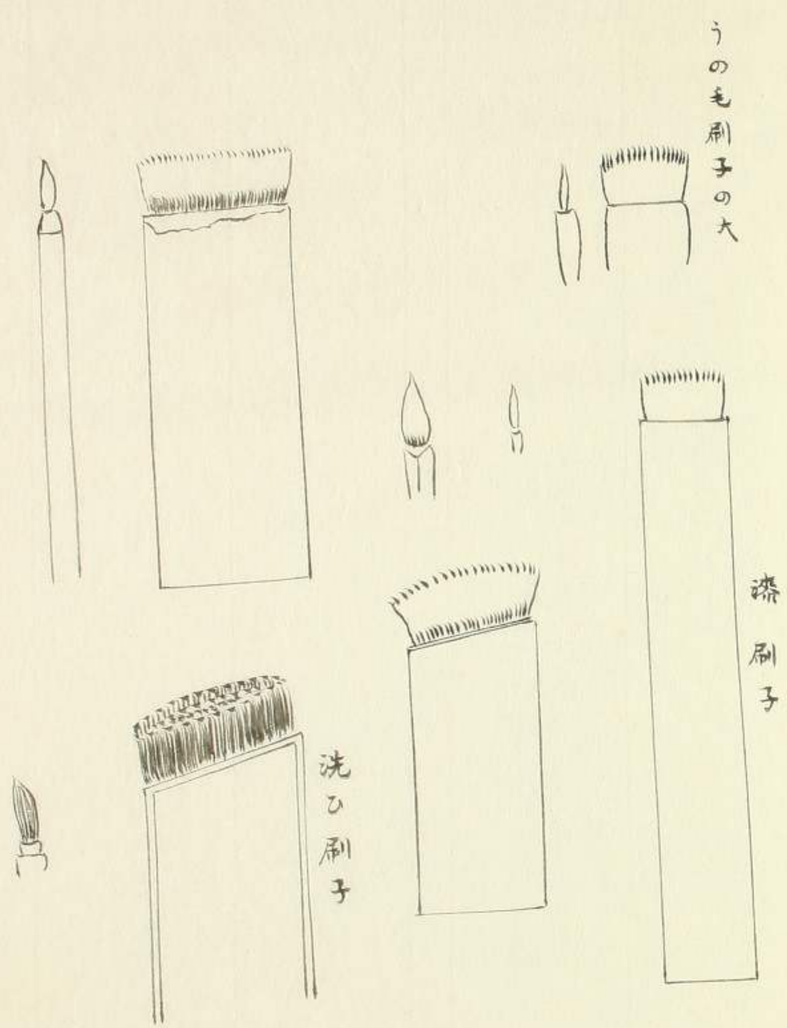


筆洗箱

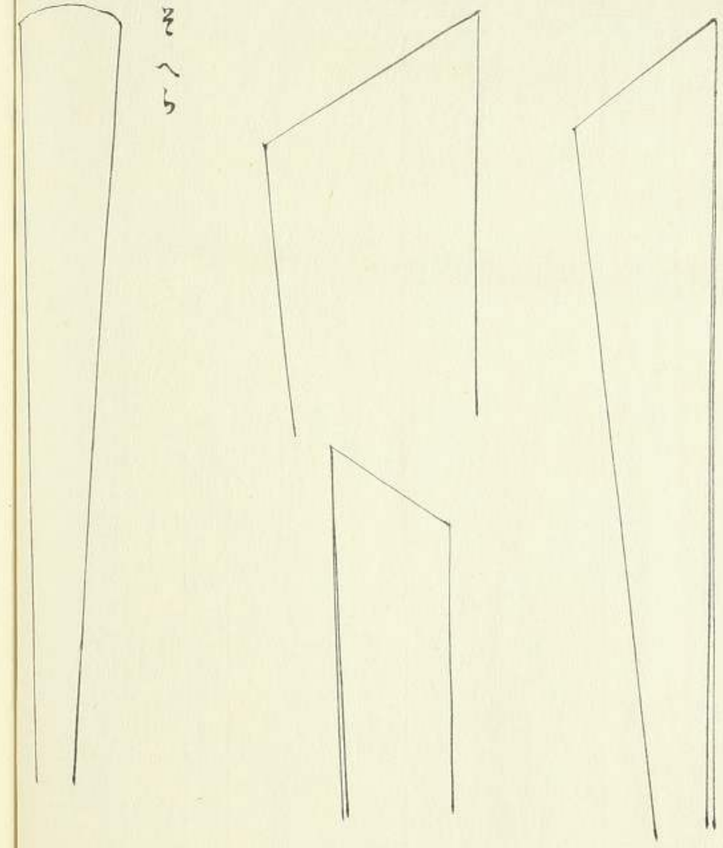


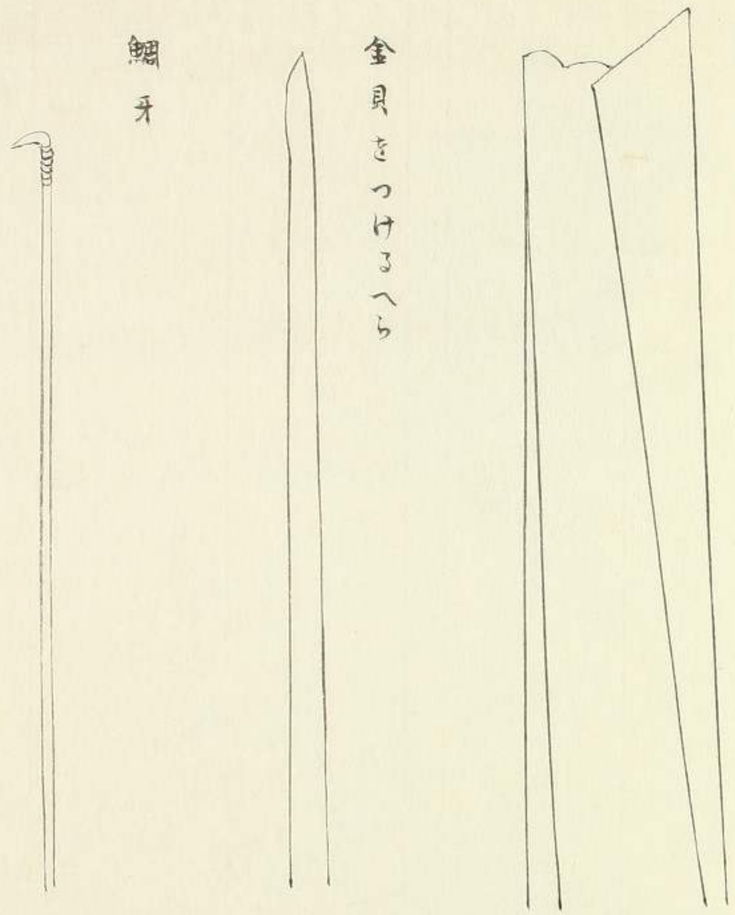
第三圖　筆類




粉蒔筆
あひしらひ筆
さひあけ筆
第四圖 刷子類
うの毛刷子の大
濟刷子
洗ひ刷子

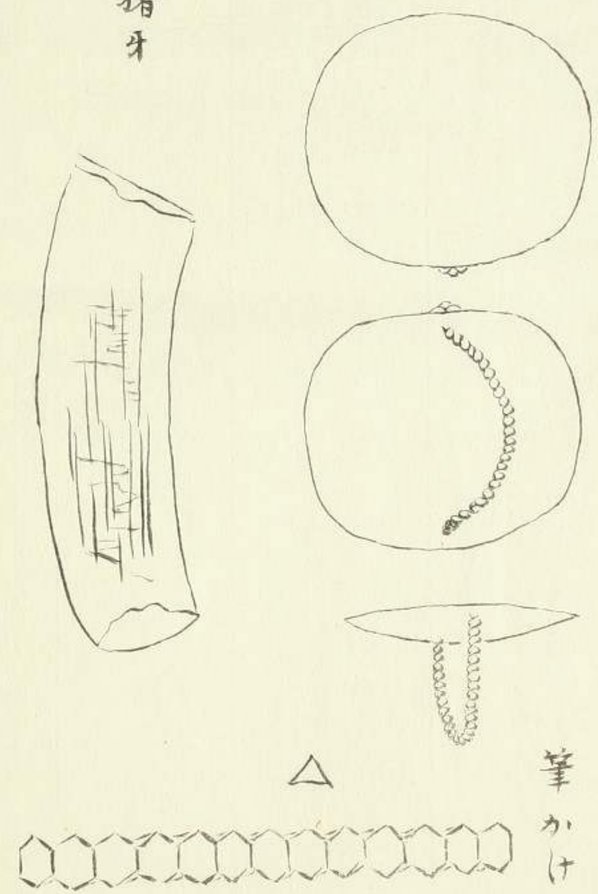
第五圖　箆類





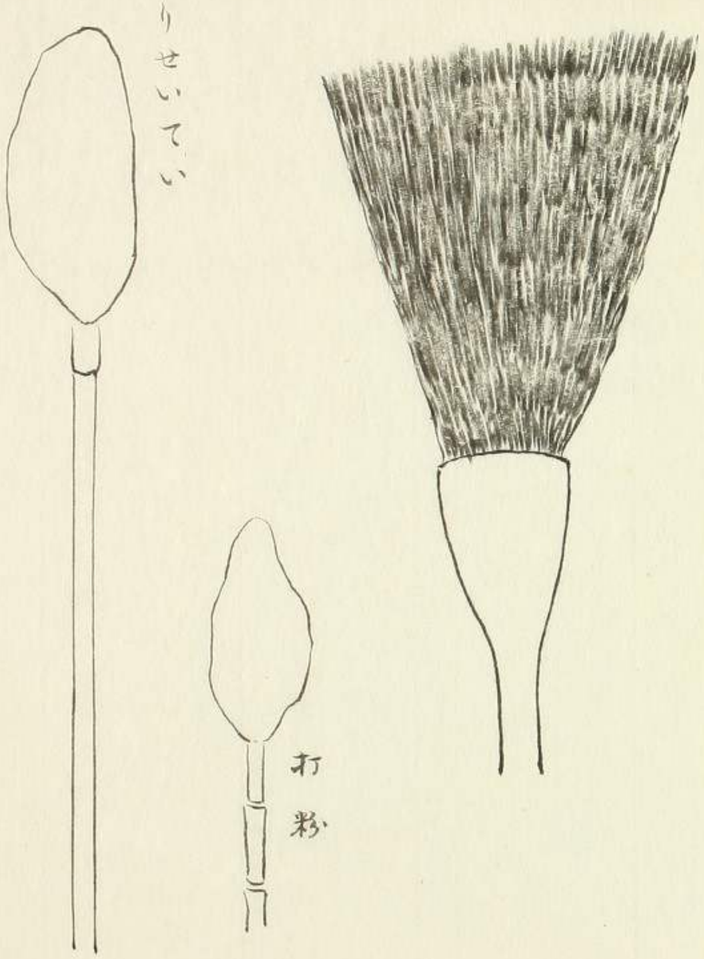
第六圖　八盤

猪牙

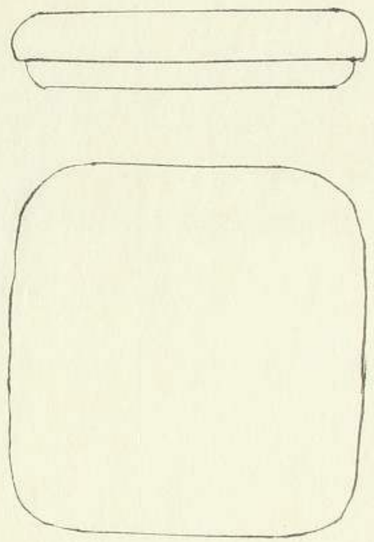


第七圖

大毛棒

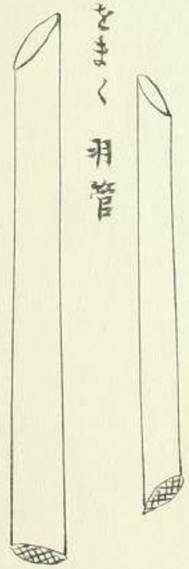


金貝箱

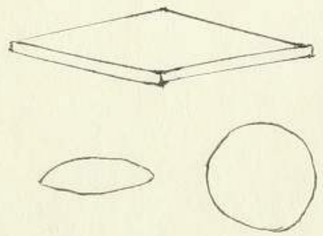


第八圖

粉をまく羽管



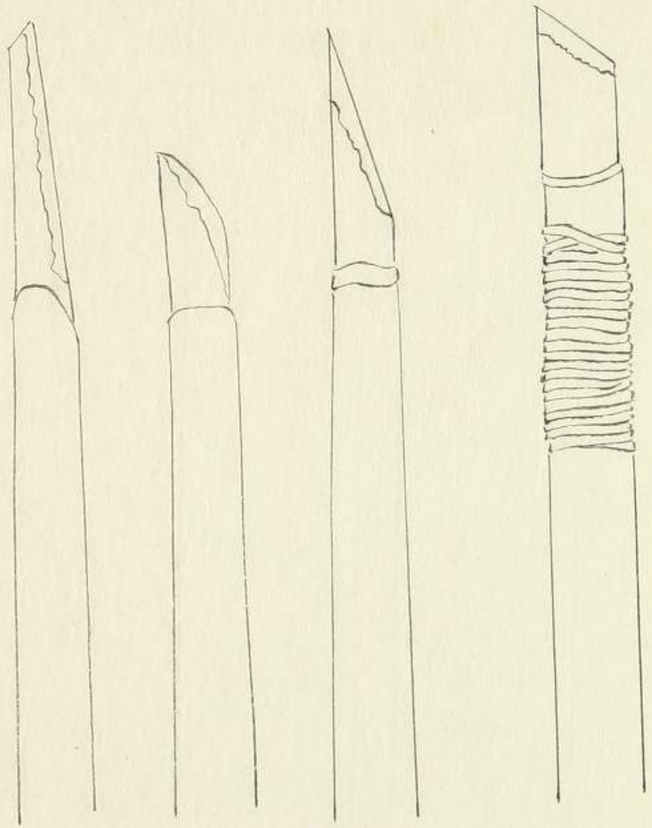
切金ならし



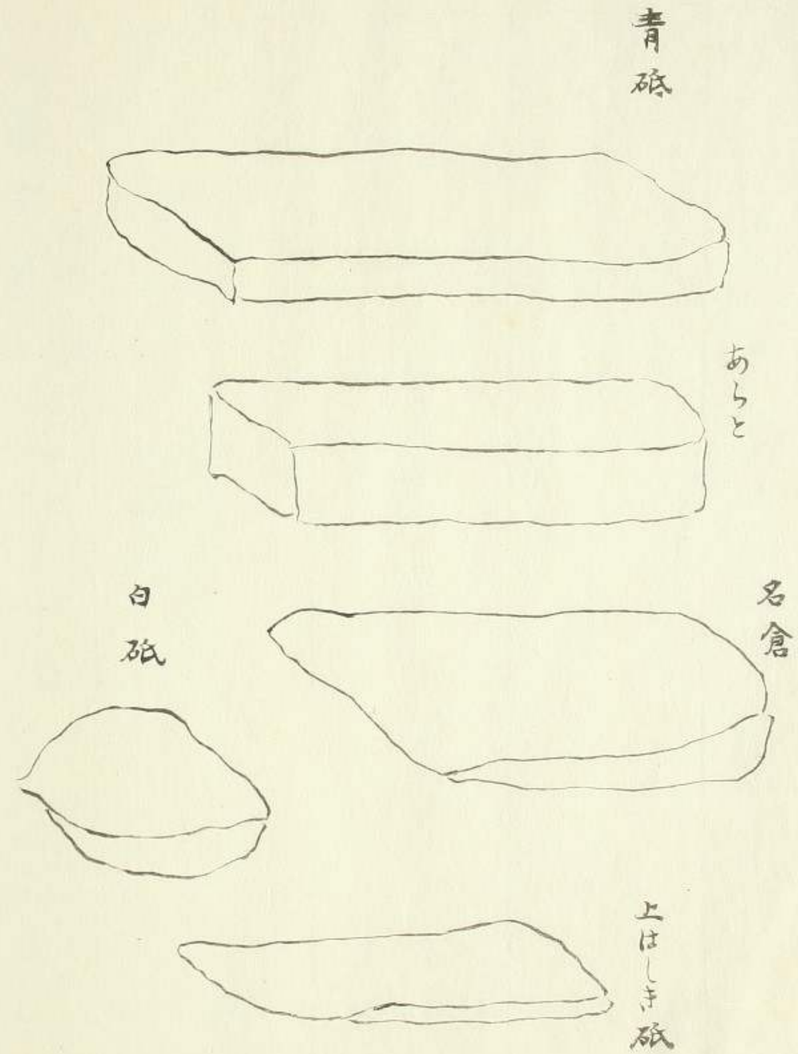
ごいし

第九圖

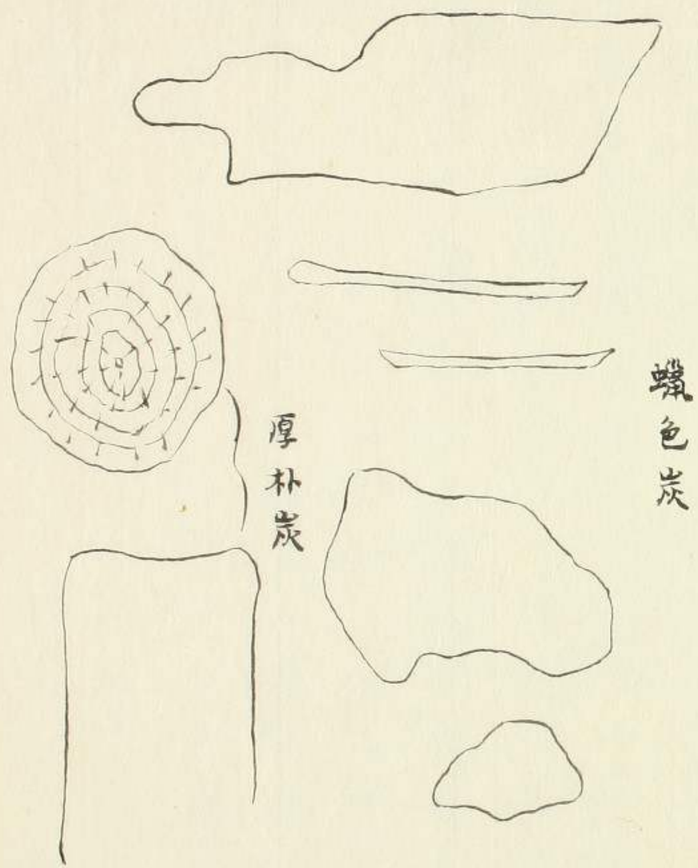
小刀類



第十圖



第十一圖



第十二圖

○蒔繪諸器械の解

第一圖　蔭室

蔭室は手風呂と稱へ桐をもて製せしものよろし通常はかふせ蓋にして巾二尺五寸長き三尺深さ一尺二三寸のものなり今此の蔭室は予かゞて製せし所にして寸法は高さ二尺五寸横二尺深さ二尺なりさてこの器械は諸の漆塗を入れ漆を乾かすに用ゐるなり其の法は先つ水をもて蔭室内をしめし塗物を入れ蓋をなしおくなり其のしめし加減は暑氣の頃はから蔭室と

稱へ少しくしめすのみ寒氣の頃は水の流るゝほとにしめし極寒のころは微温湯にてしめすへし其の他晝夜晴雨の模樣によりて加減ありて能く實地に就き工夫するにあらされは知りかたし

但し蔭室の加減は甚むつかし加減強けれは漆燒けて赤くなる也

第二圖筆類

ねぢ筆は鼠毛および兎毛をもて製せしもの也鼠毛の筆は下繪の細線をかくに用ゐるなり其の毛は九州地方より大坂に輸る米穀を積たる船中の鼠の長鬚にかきるものとせり其の價甚貴し兎の毛の筆は地を塗るに用ゐるなり彩蒔筆およびあひしらひ筆は狸毛鹿毛なと毛のこはきをよしとす

第三圖　刷子類

刷毛はうの毛大小いつれも上筆品を用ゐるへしあらひ刷子は筆およひ他日刷子なとに付きたる漆をあらひ落すに用ゐる也

第四圖　箆類

うるし篦はいつれも漆を漉し漆を練るに用ゐるものにしてこくそ篦はこくそを練て四處を塗りこみ又は布著をなす時に用ゐるなり又金貝篦は金貝をつけるに用ゐるも

鯛牙は鯛魚の牙なり小箱の隅なとすへて指先のとゝかさるところはこれをもて磨くも

第五圖　爪盤　猪牙

爪盤は鼈甲又は水牛なとにて製せしものにて左の拇指にはさみ漆をたらしつかふも

猪牙は野猪の牙にして下繪をこすりなめらかにするに用ゐるも

第六圖　毛棒類

毛棒に三種あり細毛棒あひしらひ毛棒夏毛々棒なりみな粉蒔に用ゐるなり圖中の毛棒は即夏毛棒にして粉を蒔く前に塵を拂ふに用ゐるなり

やりせいていは粉をまく時に用ゐるものにして真綿をもて製せしもの也

第七圖　粉筒　金貝箱　切金ならし

粉まき筒は鳥の羽管又は竹をもて製せしもの

大小数種あり粉を蒔くこと甚むつかしまつ蒔かんとするほと粉を筒に入れて左の手に持ち右の指先にて軽く筒を打ちながら蒔くなり壯年の人の蒔きたる粉は粉の量目少くして金色の光りよろし老人の手の重く蒔きたるは光りあしく且むらある也秘傳なり

金貝箱は金貝を入るゝなり何れも漆蓋にせしもの形状は各自隨意なり

切金ならしは切金を此の盤の上におき碁石をもて摺りて平にする也切金の筒は竹の筒を塗りたるものよろし大小適宜也

第八圖　小刀類

小刀はかの道具塗師の用ゐるさきまる并にひもきりの類にして其の他は各其の手に馴たる小刀を用ゐるなり

第九圖　砥石類

名倉砥はすべてうるしの面を研くに用ひまたあら砥白砥の類は又物を研くに用ゐる也

第十圖　炭類

蠟色炭および厚朴炭は粉を蒔きたる上または

漆せし面面なとすへてうるしの面を研くに用
ゐるなり

第十一圖　吉野紙　角粉

吉野紙は漆を漉すに用ゐるなり因りて一に漆
漉紙といふ圖のごとく漆を中に入れ両端を捻
りて漉すなり又角粉はすへて漆の面を研くに
用ゐる鹿角を焼きたるものなり

第十二圖　蒔繪臺　筆洗箱

蒔繪臺は檜桂厚朴の類にて製せしもの佳なり
寸法は適宜なれとも大抵長さ二尺幅一尺二三
寸引き出しにはすへて前に載せたる小器械を
入るゝなり

筆洗箱は寸法適宜なれとも大抵長さ七八寸幅
四五寸なるを用ゐるなり

○蒔繪の手術

蒔繪の手術は口言ひ難く筆記しかたしもとより實地に就かされは示すこと能はさるなり今其の肝要なる手術の一二をあけて示すこと左のことし

第一

さし針は針のさきにてすへて花の蕋又は葉などのすじ〳〵をきめつけるなりつけ指とて小指

第一
さし針する圖

を定木として筋を引き画かくこと常法なり指をつけされはきまらす

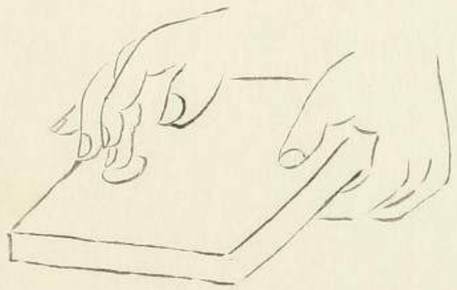
第二

切金ならしは切金を盤の上におき碁石をもて其のかと〳〵を平にならすなり

第三

切金をつけるには竹又

第二
切金をなす圖



は鯨にて製したる細き鋏にて切金をはさみ漆面に貼付せしむる也

第四

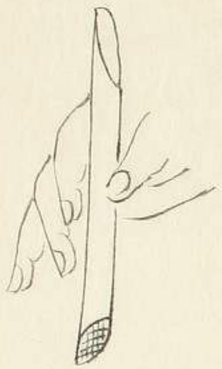
針砥とて青砥を白く削りたる其の尖にて貼付せし切金の凹みなどを研く也

第三 焼金をつける圖

第四

第五

前にも云へる如く粉をまくは最むつかし其大要はすへて管をねせて蒔くへしたて、蒔く時は粉の角たちて見くるし粉の蒔終りに至りてたて、蒔きおさむる也すへて粉は蒔方の手練にて損益あり上手は小量の粉を蒔きて幅廣く見へて美はし拙手は多く粉をつかひて見苦し實地の練磨に非されは



第五 粉をまく圖

よくし難し

第六

第七

第七 砥の粉をうつ圖

第六 すり漆する圖

第八

仕上をなす時奉書紙を軟らかにもみて其の尖にて徐々に磨くなり

第九

すへて漆を練るには手をかへし〳〵して加減よくなるまて練る合はする也

第十

刷子はなるへくたて、つかふへし

第八 奉書紙にてとく圖

第九 漆をねる圖

第十漆刷子をつかふ圖